

埋文センターニュース

第22号

2005.11.1

津市埋蔵文化財センター



山の脇遺跡B地区（上は東から、下は南東から）

山の脇遺跡 ～最近の発掘調査から～

1. はじめに

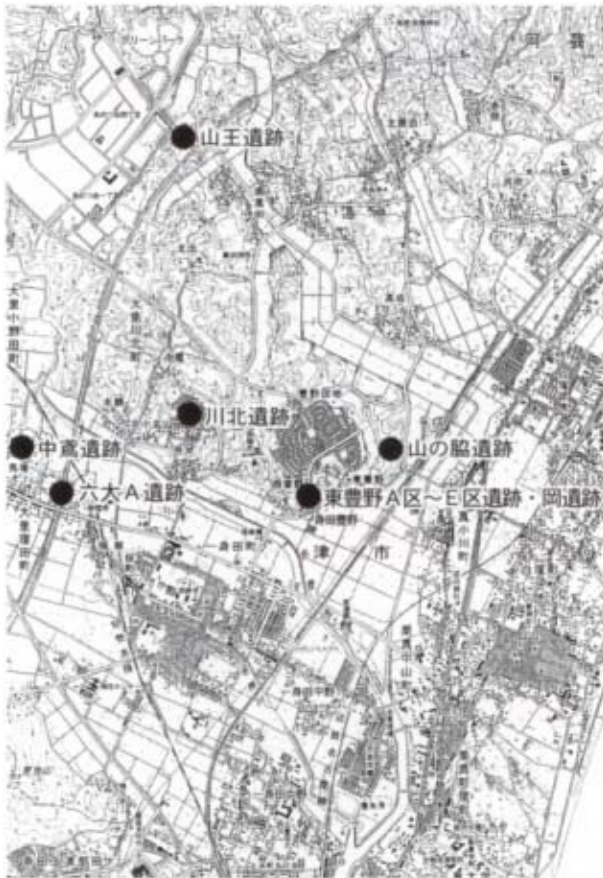
山の脇遺跡は、津市北部の志登茂川北岸の丘陵部に位置しています。この丘陵の畑地には、土器片が散布していることが古くから知られており、弥生時代後期頃の集落ではないかと考えられていました。また、山の脇遺跡の西方の丘陵には岡遺跡や東豊野A区～E区遺跡があり、その一部は昭和30年代後半に三重大学によって発掘調査が行われて、弥生時代の竪穴住居や溝などが確認されています。

今回の発掘調査は、福祉施設の建設にともなうものです。今年1月に実施した範囲確認調査の結果、遺構・遺物が検出された丘陵の東側斜面と西側斜面の合計1,800㎡について埋蔵文化財の保護措置が必要と判断され、このうちの造成工事で遺跡が消滅する1,070㎡の範囲について、4月から5月にかけて本発

掘調査を実施しました。

2. 調査の概要

山の脇遺跡の所在する丘陵の頂部は、現在平坦な畑地となっており、土器の散布もほとんど認められませんでした。範囲確認調査の際にトレンチを設定したところ、この部分については、過去に畑地を造成する際に広範囲にわたって削平を受けていることがわかり、遺構・遺物ともまったく残存していない状態でした。したがって、山の脇遺跡で埋蔵文化財保護の対象となったのは、丘陵の東側斜面と西側斜面の畑地造成の影響が及ばなかった部分の約1,800㎡ということになります。本発掘調査は、作業工程の関係でA～C地区の3地区に分けて行うこととしました。以下、各地区ごとに概要を述べます。



遺跡位置図(1:50000・国土地理院2万5千分の1『白子』)



現況地形図 (1:1200)

・ A 地区

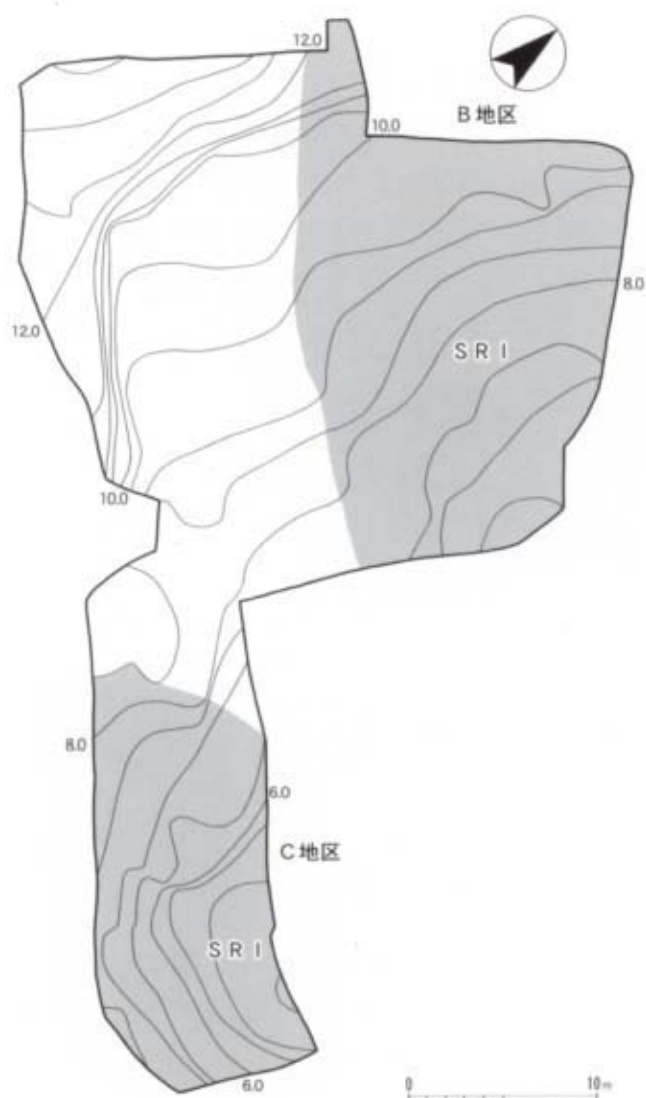
丘陵西側斜面の最高所に位置する調査区です。範囲確認調査の際に約10m西方に設定したトレンチでは、谷もしくは大溝とみられる遺構を検出しており、埋土内からは大量の土器が出土しています。調査の結果、A地区では遺構・遺物とも検出されず、畑地造成の影響がこの部分まで及んでいることがわかりました。

・ B 地区

丘陵東側斜面に設定した調査区で、中央部分の畑地を中心に土器片が散布しており、当初は竪穴住居などの集落に関する遺構が検出できるものと予想していました。範囲確認調査の結果、この部分は大きな谷（SR1）の

一部であり、埋土内に大量の土器が良好な状態で含まれていることから、本発掘調査の対象としました。

調査の結果、B地区の南半部については畑地造成の影響で遺構・遺物とも存在しませんでした。北半部で検出した谷（SR1）の埋土内から大量の土器が出土しました。遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭のものがほとんどです。埋土を掘削した後、谷（SR1）の底部を精査したところ、B地区の北東隅でピットを検出することができました。掘立柱建物としてまとまるものはありませんが、須恵器の小片が出土したピットも少数ながらあり、谷（SR1）がある程度埋没した段階で掘削されたピットもあるようです。



B・C地区測量図(1:400)



B・C地区調査前の状況（東から）



C地区全景（西から）

・C地区

東へ細長く延びる調査区ですが、当初は笹が一面に密集しており、地表面の観察すらできない状況でした。範囲確認調査の際にトレンチを設定したところ、谷（SR1）の南端部が検出できたため、本発掘調査の対象となりました。

調査の結果、予想よりもはるかに谷（SR1）の傾斜がきつく埋土も厚かったため、B地区よりもさらに良好な状態で遺物を検出することができました。出土遺物は大きく2時期に分けることができ、弥生時代後期から古墳時代初頭のものと、B地区ではほとんど出土しなかった古墳時代中期頃の土師器とに分類できます。また、須恵器は小片がわずかに出土したのみで、図示できるようなものは見あたりませんでした。

埋土の掘削後に谷（SR1）の底部を精査したところ、溝やピットを検出することができました。このうち溝については、C地区の

南端へいくほど浅くなり、南壁の断面では、ほとんど確認できない状況です。出土遺物の状況から、弥生時代後期から古墳時代初頭のものが大半を占めそうです。

3. まとめ

調査の結果、①山の脇遺跡の所在する丘陵は、過去の畑地造成の際に頂部を中心として大規模な削平を受けていること、②削平を免れた谷（SR1）の埋土には大量の土器が含まれており、弥生時代後期から古墳時代初頭と古墳時代中期の2時期に大別できることがわかりました。

出土した土器のほとんどが壺・甕・高杯といった日常雑器類であること、完形で出土したものがほとんどないことなどから考えると、本来この丘陵の上半部には弥生時代後期から古墳時代の集落があり、過去の畑地造成の際に悉く消滅してしまったものとみられます。

（村木一弥）



C地区で出土した土師器甕（左）と、その接合作業の様子（右）

津市の埴輪

埴輪は、岡山県古備地方の弥生墳墓に供献された壺と器台が、古墳の出現とともに埴輪へと発展していったものであることがわかっています。

津市では古墳時代前期には、まだ埴丘に埴輪を樹立した古墳はなく、坂本山6号墳のような小規模な古墳の埴丘から底部に孔をあけた二重口縁壺が出土しています。

津市の古墳に埴輪が出現するのは、市内最大の前方後円墳である池の谷古墳(「埋文センターニュース第9号」参照)の築造からで、池の谷古墳で採集された円筒埴輪のなかには三角形のスカシ孔のものがあることから、これらは4世紀末ごろにつくられたものと考えられています。

その後、市内では池の谷古墳に続く大型の首長墓造営は途絶え、大型古墳の主流は安濃川中流域の安濃町明合古墳へと移っていきます。明合古墳は二つの造出しをもつ一辺が約60mの大型方墳で、周辺の陪塚からも円筒埴輪のほかに、盾や蓋を象った形象埴輪が数多く採集されています。



主要遺跡分布図



池の谷古墳 円筒埴輪

古墳時代前期～中期に埴輪を有する古墳は、池の谷古墳や明合古墳のような大型古墳に限られており、埴輪を生産する技術は、大型古墳を築造する技術とともに、畿内から来た工人によってこの地にもたらされたと考えられています。しかしこの時期、この地域の埴輪がどこで、どのようにしてつくられていたのかについては、まだ明らかではありません。

古墳時代後期になると中小規模の古墳築造が急増し、これらにも埴輪が樹立されるようになって、埴輪の需要が一気に高まります。またこの時期、全国に須恵器の生産技術が波及したことで、埴輪生産にも窖窯焼成技術が導入されるようになり、津市周辺でも埴輪を生産する窯跡が幾つか発見されています。

さて、ここで藤谷窯跡群(「埋文センターニュース第10号参照」)から出土した円筒埴輪を観察してみましょう。三重県では須恵器と埴輪が同じ窯で生産されることが多いのが特徴ですが、藤谷窯跡群は僅かに須恵器等を併焼するものの、県内では最も埴輪専業窯に近い遺跡です。

○円筒埴輪

円筒埴輪は粘土紐を筒状に積み上げたものに突帯を貼り付け、スカシ孔をあけたもの

のです。円筒埴輪に類するものに、円筒の上に口縁がラッパ状に広がる壺を載せた形をした朝顔形埴輪があり、墳丘の周囲には、円筒埴輪と朝顔形埴輪が規則的に樹立されていたようです。

さて、藤谷窯の円筒埴輪は、粘土紐を積み上げ、器壁の外をハケ工具でタテ方向に調整した後、突帯を2条貼り付け、一對の円形のスカシ孔をあけたものが大多数を占めますが、一部に突帯を貼り付けた後にもう一工程、原体幅の広い工具を使用したヨコハケ調整を追加したものが存在します。

また、底部を板状工具で強く押さえつけて調整（押圧技法）した埴輪も存在するなど、畿内の埴輪と同じ技法が多く用いられているのも藤谷窯の円筒埴輪の特徴です。

しかし、藤谷窯では畿内系の埴輪とは別に、粘土を胴部の中程まで巻き上げてから倒立させ、再び粘土を巻き上げて作る大型の円筒埴輪などもあることから、同じ窯から出土する埴輪でも製作技法がやや異なるものが幾つかあることもわかってきました。おそらく藤谷窯では畿内の最先端の生産技術を導入した生産の核となる埴輪工人のもとに、様々な技法を携えた工人がより集まって埴輪を生産していたということなのでしょう。

津市では、藤谷窯のほかにも、^もツボ^{つぼ}ノ坪窯で「^{たんのわ}淡輪技法」と呼ばれる技法で埴輪が^{たんのわ}つくられていたことも明らかになっています。

淡輪技法は、植物を巻いて作った輪の上に粘土紐を巻き上げて埴輪をつくるため、底部に輪の跡の凹みがつくところに特徴があります。三重県では淡輪技法の埴輪は、須恵器生産と深く関わっていることが注目されており、同じ窯で生産された淡輪系埴輪には、藤谷窯のような製作技法の多様性があまりないこともわかっています。

津市では、窯ごとに埴輪生産に特徴があることがわかってきたところで、窯から出土した埴輪と古墳から出土した埴輪を比較して、この地域の埴輪の生産と供給について考えてみましょう。

例えば、稲葉古墳群の円筒埴輪には淡輪技法のものはありません。そこで藤谷窯と稲葉古墳群の埴輪を比較してみると、これらのなかに製作技法や法量、胴部に描かれたヘラ記号などが一致するものが多くあることがわかってきました。ただ、一部に藤谷窯にない特徴をもつ埴輪もあることから、直径20m前後の小円墳でも、複数の窯から埴輪が供給されていたと考えられます。

その顕著な例が、全長約28mの前方後円墳の^{とのむら}殿村1号墳で、墳丘から押圧技法と淡輪技法の円筒埴輪が出土しています。製作技法が全く異なる埴輪が、同じ古墳に供給されているということは、おそらく古墳周辺の複数の生産窯から、製作技法に関係なく、古墳に必要な量の埴輪が調達されたということなのでしょう。



藤谷窯跡群 円筒埴輪



稲葉3号墳 円筒埴輪・朝顔形埴輪

○形象埴輪

形象埴輪には、家や貴人にさしかける蓋を象ったもの、盾や矢を収める鞆^{ゆげ}などのように武器を象ったもの、人や動物を象ったものなど様々な種類があります。

形象埴輪には、円筒埴輪と同じように粘土紐を積み上げて形を作るもののほかに、家形埴輪のように板状の粘土を接合して作っていくものもあって、円筒埴輪の生産とは別に形象埴輪専門の工人集団が存在したと考えられています。

また、古墳に形象埴輪が導入されはじめた頃には、家形埴輪や蓋や武器など器財埴輪^{きざい}と呼ばれる一群が主流を占めていたのに対し、三重県では5世紀後半から器財埴輪が衰退しはじめ、人物埴輪が形象埴輪の主流をなすようになっていきます。

ただ、形象埴輪の器種の盛衰には地域ごとに特徴があるようで、例えば、藤谷窯では5世紀後半から6世紀初頭にかけて、箱形の系譜を引く鞆を作っていたり、石見型埴輪を作っていたりもしています。

また、形象埴輪は円筒埴輪とは違って、工人の自由奔放な意匠で作られているように見えるのですが、実は器種ごとに形や表現にいろいろな決まり事があったようです。

例えば、稲葉5号墳の鶏形埴輪(「埋文センターニュース第5号」参照)をみてみましょう。まず、鶏冠^{とさか}や肉髯^{にくひげ}、耳羽^{みみは}の有無、嘴^{くちばし}や脚の形が、鳥形埴輪のなかから「鶏」を見

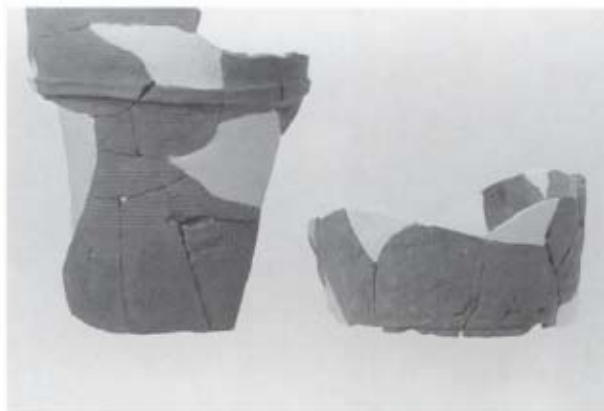
分けるポイントです。稲葉5号墳では尾に突線がつき、蹠爪^{けづめ}の痕跡がある1体が雄鶏と考えられ、これにより墳丘から雌雄がセットで出土していたことがわかります。

また、人物埴輪には甲冑^{かっちゅう}を纏った武人や、袈裟^{けさ}状の衣服を着用した巫女^{みこ}、武器や食器をもつ人物など、実に多種多様な形態が存在します。人物埴輪の衣服や髪型、着装品には、およそ決まったパターンがあって、それが人物埴輪の性別や身分、職能を識別する重要な手がかりとなっています。

ところで、稲葉古墳群では古墳ごとに形象埴輪の組合せが異なることがわかってきました。形象埴輪には形や表現に決まり事があっただけでなく、古墳のどこに、どんな形象埴輪を配置するのかにも大きな意味があったようです。

しかし、古墳祭祀において形象埴輪が何を表現していたのかについては、埋葬儀礼とする説や王位継承儀礼とする説などがあって、今も大きく議論が分かれています。

池の谷古墳の築造とともに畿内からこの地へともたらされた津市の埴輪文化は、5世紀後半の中小規模の古墳の増加と窖窯焼成技術の導入を機に大きく発展しますが、6世紀前半には早くも終息へと向かいます。この時期、この地域の古墳祭祀における埴輪の役割に大きな変化があったものと推察されます。(藤田充子)



殿村1号墳 円筒埴輪(左が押圧技法、右が淡輪技法)



稲葉5号墳 鶏形埴輪

埋文センター日誌抄 平成17年度上半期

4月7日《見学》銅鐸の神秘を探る旅 33名
 4月15日《見学》三重県埋蔵文化財センター10名
 4月19日《見学》神戸小学校 66名
 4月19日
 ～5月24日 《調査》山の脇遺跡発掘調査
 4月21日《調査》東豊野B遺跡隣接地工事立会
 4月26日《調査》育生小校庭遺跡隣接地工事立会
 " 《見学》一身田小学校 100名
 5月2日《見学》山の脇遺跡(一身田小学校)103名
 5月6日《見学》鈴鹿国際大学博物館実習7名
 5月10日《普及》出張講座(安東小学校)25名
 5月23日《見学》市政教室(栗真中山町光寿会)45名
 5月24日《見学》安東小学校 25名
 5月27日《普及》出張講座(大里小学校)44名
 6月1日《普及》寿大学講師(橋北公民館)
 6月8日《見学》市政教室(新芽手話サークル)30名
 6月15日《普及》寿大学講師(豊里公民館)
 " 《見学》中央公民館講座 25名
 6月16日《見学》南郊公民館寿大学・女性学級45名
 6月17日《見学》南郊公民館寿大学45名
 6月17日 《貸出》川北遺跡出土遺物ほか
 ～7月11日 (鈴鹿国際大学)
 6月22日《普及》寿大学講師(豊里公民館)
 6月24日 《貸出》四ツ野B遺跡出土遺物ほか
 ～9月9日 (松阪市文化財センター)

6月24日《見学》南郊公民館寿大学・女性学級45名
 7月4日《普及》長谷山古墳群現地見学(山好会)21名
 7月6日 《貸出》四ツ野B遺跡縄文土器深鉢
 ～9月21日 (鈴鹿市考古博物館)
 7月12日《見学》三重長寿大学 8名
 7月14日《普及》出張講座(敬和小学校)45名
 7月15日《普及》出張講座(高茶屋小学校)70名
 7月19日《普及》出張講座(高茶屋小学校)71名
 7月25日《調査》笠取A遺跡確認調査
 " 《見学》津市教育研究所新任教員研修25名
 8月20日《調査》西里の上遺跡工事立会
 8月26日《調査》栗真町屋町地内工事立会
 9月20日《見学》市政教室(桜町一寿会)25名



出張講座

《編集後記》

平成7年3月に創刊された“埋文センターニュース”ですが、今回が最終号となりました。長くご愛読いただき誠にありがとうございました。

さて、本市は、平成18年1月1日に安芸郡河芸町、芸濃町、安濃町、美里村、久居市、一志郡香良洲町、一志町、白山町、美杉村と合併し、新たな“津市”としてスタートします。

ここ津市埋蔵文化財センターも新体制でスタートします。新年度には、装いも新たなセンター機関誌をお届けすることになるでしょう。(編集子)

発行日：平成17年11月1日

編集発行：津市埋蔵文化財センター

〒514-0058

三重県津市安東町1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

印刷：森田印刷株式会社